

私にできること

近藤 あゆみ

私の母は、小学校の先生をしています。地元の小さな小学校で、障害を持っている子供達の学級の担任をしていました。学級といっても、その時の学級の児童の数は二人だけでした。初めてその子達に会ったとき、私はまだ中学一年生でした。その子達は、他の子とは違った顔をしているような気がしました。もちろん人はみんなそれぞれ違う顔を持っているのですが、それとは別の特別な雰囲気にも包まれているような気がしました。少なくとも、その時の私はそう感じたのです。それと同時に、そう感じてしまう自分を嫌だとも感じました。なんだかその子達に対して差別意識を持っているような気持ちになりました。その時に私は、そういうことは考えないで、他の子と同じように接しようと考えました。しかし、その子達はあまり上手く話せないし、他の人とあまり話をしようとしませんでした。足も速くありません。だから、地域や子供会の活動などを行っている時に、わずらわしさや、時にはいらだちを感じてしまうことがありました。そのたびに、この子達は障害を持っているのだから仕方がないと考えていました。

翌年、私は子供会の会長になりました。運動会や、色々な子供会活動の中で、私は、その子達に負担がかからないやり方で進めようと考えていました。それがその子のためだと思っていたのです。

しかし、母の話が、私の考え違いに気付かせてくれました。母は時々、学校の出来事を私に話してくれます。その時は、その障害を持った子達のことを話してくれました。

「今日は、こんな事をがんばっていた。」「こんなことができるようになった。」

話の内容はそれだけなのですが、この話を聞いているうちに私は気付きました。

「障害を持っていても、だんだん色々なことができるようになるんだ。」とても当たり前のことですが、それまでの私は気付いていませんでした。けれど、本当はもっと早く気付けたのではないかと思います。私は、障害を持っている子は、色々なことができないと決めつけていました。もしかしたら、私ができないと思っていたことの中に、できるかもしれないことがあったかもしれません。私は、その子達のことを考えて優しくしているようで、実は差別意識を持って、その子達の可能性を奪ってしまっていたかもしれない。そして、そういう子達に親切にしている自分に満足して、だからこそ、大切なことに気付けなかったのではないか。私は結局、自分のことしか考えていなかった…そう考えると、だんだん自分が情けなく思えてきました。今振り返ってみると、私はその子達に接するとき、自分より下の人達に優しくするような気持ちでいたのだと思います。自分より色々なことができない人達に接する気持ちで。ですが、今の私を見るとどうでしょう。根気がなくすぐに飽きてしまう、本気で努力して物事をなしとげたことがない自分……。私のどこが、あの子達より上なのでしょう。あの子達と私とは、きっとそんなに違わないのでしょうか。私にも、あの子達にも、できないことはたくさんあるのです。だけど、私だからできることもきっとあります。あの子達だからできることも。

あの子達と母のおかげで、私は大切なことに気付くことができました。みんな、自分らしく、できることを精一杯やっつけていけばいいんだと。今は、自分と他の人とを比べたりしないで、自分のできることをひとつひとつ増やしていくだけでいいと思えるのです。そのことを気付かせてくれた人達にとっても感謝しています。今はもうこの小学校にはいないけれど、あの子達がずっと元気でありますように。心からそう思います。